文化

綾なす知

80年目の京大人文研

人間力学 影響大きい共同研究

「人文研といえば共同研究。共同研究といえば人文研」。そう言われるほどに、京都大人文科学研究所にとっては存在意義そのものでもある共同研究は、どうやって生まれたのか。

先駆となったのは、3研究所が合併して新・人文研が誕生した1949年、西洋部(当時)で始まった「ルソー研究」だ。桑原武夫氏らのグループが、政治思想家、作家、教育学者など多様な顔を持つ「近代の巨人」を多角的にとらえ、反響を呼んだ。以降、日本部、東方部でも次々と共同研究班が生まれる。

チーム研究が普通の理系分野と違い、人文科学は当時、個人の独創的な着想を、史料の精査などで掘り下げていく作業が中心。「10人寄っても2、3の成果しか生まない時もある。人文研の共同研究が20、30の力を出したのは、人間力学、知的力学が有効に働いたから」。60~70年代に助手だった樺山紘一・東京大名誉教授は話す。

共同研究のかたちは文献解読型、フィールドワーク型、議論型などがある。桑原氏はさらに、多分野から新しい発想を持った研究者を集め、分業により短期集中型で論文を生み出す手法を導入。縦割りに陥った大学の講座制の宿弊も打破した。「タコは自分の体のサイズをつぼに合わせてしまうが、人文研の研究班では、他人の刺激で自己拡張がどんどん起こる。それが面白かった」と梅棹忠夫・国立民族学博物館(民博)顧問は振り返る。

梅棹氏が初代館長となった民博(吹田市)や、国際日本文化研究センター(日文研、京都市)も共同研究を積極的に採用。深いが、広い視点に欠ける「研究のタコつぼ化」に悩む全国の大学でも学際研究は盛んになった。

他人の刺激受け自己拡張
新しい仕掛け出せず危機感

だが、「人文研のスタイルはやはり特別」という声は根強い。だれもが指摘するのが「手弁当」「研究会の密度の濃さ」の二つだ。

民博や日文研を含め他での共同研究は年に4、5回程度集まり、報告書をまとめるのが一般的。メンバーがそろうのは年1回のシンポジウムの時だけ、というケースもあり、毎週か隔週開催が基本の『人文研方式』は異例だ。しかも、多くの場合、所外の班員にも旅費支給はなく、身銭を切って駆けつける。

「昔は夕食だけでなく一緒に銭湯にまで行った。今も面白がりながら議論を尽くすのは変わらない。各人がすでに手にした成果を持ち寄り、予測通りの結果を出すような、よその共同研究とは別物」と横山俊夫教授(文明史)も強調する。

助教(助手)の役割も特徴的だ。任期が最大10年と長く、個人研究室もあてがわれ、共同研究も主宰できる。共同研究の成否は「教授よりも事務局機能を担う助手次第」との見方から、「助手王権」との言葉までできた。

学者としての経験の差や専門の壁を超えるため、個人的な着想や資料の感想などを公開する「カード・システム」など知識を共有する手法も工夫された。

また、一個人に成果を帰属させる傾向が主流の中、共同研究で得た知見が誰のものか、はっきりしないことを疑問視する声もある。

「昔、研究班に参加した米イェール大の研究者は『君らは共産主義者だ』とあきれた。新発見の知識を自分の手柄にする前に、惜しげもなく仲間に披露して共有財産にする、と」と横山教授は笑う。

本年度、人文研で行われている共同研究は26。「多すぎてどれも中途半端になる」「共同性が薄らぎ、単に論文を寄せ集めた報告書もある」との指摘も聞かれる。近年、脚光を浴びる成果に乏しいのも否めない。

「昔は研究者と同時に、優秀なエディター(編集者)やリーダーがいた」。5日の創立記念講演で、人文研OBの社会学者加藤秀俊氏は指摘した。「理学部の万年講師だった今西錦司さん(生態学者)の加入で雰囲気が変わったり、所外の人の影響も大きかった」とOBの哲学者鶴見俊輔氏も、往時の人間力学の一端を披露した。

カリスマが生まれにくい現代。豊かな人的資源を生かし、いかにダイナミックな化学反応を起こすか。

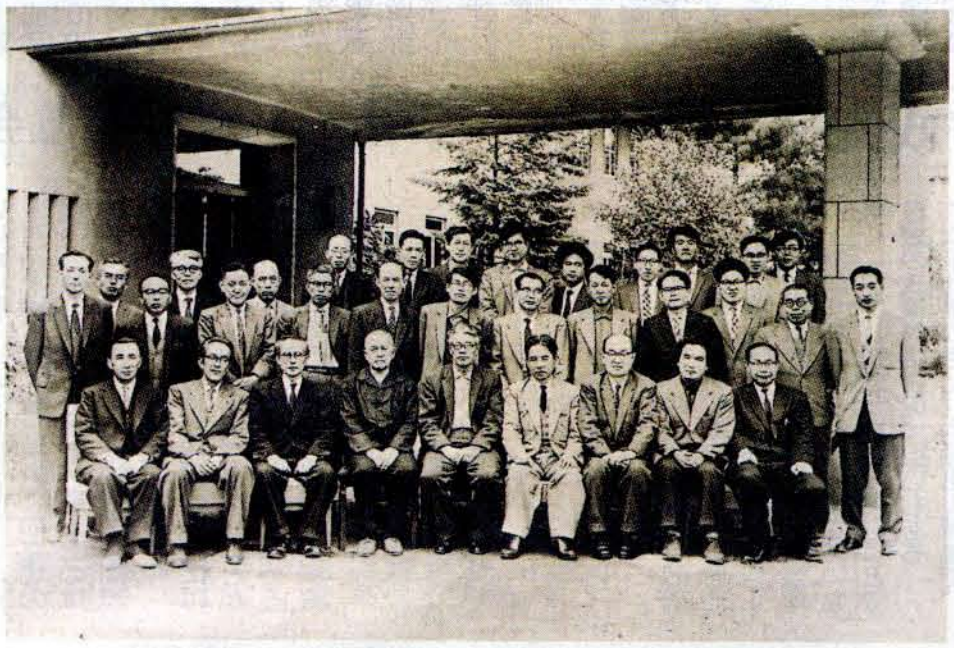
「下手すると僕らの世代は、人文研の共同研究は素晴らしい、という神話を演じ続けるだけになる」。若手研究者の危機感は、新しい仕掛けが見いだせない現状を物語る。

＝毎週水曜連載です。

2009年度の共同研究一覧

【人文学研究部】
- 複数文化接触領域の人文学
- 移民の近代史―東アジアにおける人の移動
- 虚構と擬制―総合的フィクション研究の試み
- 世界的視野から見た日本の人種・民族表象
- 近代古都研究
- 第一次世界大戦の総合的研究に向けて
- 王権と儀礼
- 古典のなかのアジア史
- 色道書の言語をめぐる文明史的研究
- 近代日本と異文化接触―「同時代化」を生きた人々の記録
- 人文研探検

【東方学研究部】
- 西陲發現中國中世寫本研究
- 漢簡語彙の研究
- 伝統中国の生活空間
- 三教交渉の研究（Ⅱ）
- 北朝石刻資料の研究
- 長江流域社会の歴史景観
- 東アジア古典文献コーパスの研究
- 銀雀山漢墓竹書残簡の整理―中国古代の基礎史料
- 陰陽五行のサイエンス
- 東アジア地域間交渉の文書と言語
- 唐代文学の研究
- 真諦三蔵とその時代
- 中国古鏡の研究
- 中国社会主義文化の研究
- 南アジア北辺地域における文化交流の諸相



1960年代初頭、「人文研の黄金期」といわれたころの所員たち。今西錦司（中段左から5人目）、多田道太郎（同右から4人目）、会田雄次（下段左から2人目）、桑原武夫（同5人目）、貝塚茂樹（同7人目）の各氏らが並ぶ＝人文研提供

樺山紘一氏

加藤秀俊氏

鶴見俊輔氏